

寒山拾得

森鷗外



唐とうの貞観じょうがんのころだというから、西洋は七世紀の初め日本は年号というもののやつと出来かかったときである。閩りよきゅういん丘胤ゆういんという官吏がいたそうである。もつともそんな人はいなかったらしいと言う人もある。なぜかと言うと、閩は台州の主簿になつていたと言ひ伝えられているのに、新旧の唐書に伝が見えない。主簿といえ、刺史ししとか太守とかいうと同じ官である。支那全国が道に分れ、道が州または郡に分れ、それが県に分れ、県の下に郷があり郷の下に里がある。州には刺史といい、郡には太守という。一体日本で県より小さいものに郡の名をつけているのは不都合だと、吉田東伍さんなんぞは不服を唱えている。閩がはたして台州の主簿であつたとすると日本の府県知事くらいの官吏である。そうしてみると、唐書

の列伝に出ているはずだといふのである。しかし閻がいなくては話が成り立たぬから、ともかくもいたことにしておくのである。

さて閻が台州に着任してから三日目になった。長安で北支那の土埃つちほこりをかぶつて、濁つた水を飲んでいた男が台州に来て中央支那の肥えた土を踏み、澄んだ水を飲むことになつたので、上機嫌である。それにこの三日の間に、多人数の下役が来て謁見えつけんをする。受持ち受持ちの事務を形式的に報告する。そのあわただしい中に、地方長官の威勢の大きいことを味わつて、意気揚々としているのである。

閻は前日に下役のものに言つておいて、今朝は早く起きて、天台島の国清寺をさして出かけることにした。これは長安にいたときから、台州に着いたら早速往こうときめていたので

ある。

何の用事があつて国清寺へ行くかというのと、それには因縁がある。閻が長安で主簿の任命を受けて、これから任地へ旅立とうとしたとき、あいにくこらえられぬほどの頭痛が起つた。単純なレウマチス性の頭痛ではあつたが、閻は平生から少し神経質であつたので、かかりつけの医者薬を飲んででもなかなかなおらない。これでは旅立ちの日を延ばさなくてはなるまいかと言つて、女房と相談していると、そこへ小女が来て、「ただいま只今こじきぼうずご門の前へ乞食坊主がまいりまして、ご主人にお目にかかりたいと申しますがいかががいたしましう」と言つた。

「ふん、坊主か」と言つて閻はしばらく考えたが、「とにかく逢つてみるから、ここへ通せ」と言いつけた。そして女房を

奥へ引つ込ませた。

元來闍は科挙に応ずるために、けいしよ経書を読んで、五言の詩を作ることを習つたばかりで、仏典を読んだこともなく、老子を研究したこともない。しかし僧侶や道士というものに対しては、なぜということもなく尊敬の念を持っている。自分の会得えとくせぬものに対する、盲目の尊敬とでも言おうか。そこで坊主と聞いて逢おうと言つたのである。

まもなくはいつて来たのは、一人の背の高い僧であつた。垢あかつき弊やぶれた法衣ほうえを着て、長く伸びた髪を、眉の上で切つている。目にかぶさつてうるさくなるまで打ちやつておいたものと見える。手には鉄鉢てつぱつを持っている。

僧は黙つて立つていたので闍が問うてみた。「わたしに逢いたいと言われたそうだが、なんのご用かな」

僧は言った。「あなたは台州へおいでなさることにおなりなすったそうでございますね。それに頭痛に悩んでおいでなさると申すことでございます。わたくしはそれを直して進ぜようと思つて参りました」

「いかにも言われる通りで、その頭痛のために出立の日を延ばそうかと思つていますが、どうして直してくれられるつもりか。何か薬方でもご存じか」

「いや。四大の身を悩ます病は幻でございます。ただ清浄な水がこの受糧器に一ぱいあればよろしい。咒まじないで直して進ぜます」

「はあ咒をなさるのか」こう言つて少し考えたが「仔細あるまい、一つまじなつて下さい」と言つた。これは医道のことなどは平生深く考えてもおらぬので、どういふ治療ならさせ

る、どういふ治療ならさせぬという定見がないから、ただ自分の悟性に依頼して、その折り折りに判断するのであった。もちろんそういう人だから、かかりつけの医者というのもよく人選をしたわけではなかった。素問そもんや靈枢れいすうでも読むような医者を探してきめていたのではなく、近所に住んでいて呼ぶのに面倒のない医者にかかつていたのだから、ろくな薬は飲ませてもらうことが出来なかつたのである。今乞食坊主に頼む氣になつたのは、なんとなくえらそうに見える坊主の態度に信を起したのと、水一ぱいでする咒なら間違つたところでは危険なこともあるまいと思つたのとのためである。ちようど東京で高等官連中が紅療治べにりょうじや氣合術に依頼するのと同じことである。

閻は小女を呼んで、汲みたての水を鉢はちに入れて来いと命じ

た。水が来た。僧はそれを受け取って、胸に捧げて、じつと
閻を見つめた。清浄な水でもよければ、不潔な水でもいい、
湯でも茶でもいいのである。不潔な水でなかったのは、閻が
ためには勿怪もつけの幸いであつた。しばらく見つめているうちに、
閻は覚えぬ精神を僧の捧げている水に集注した。

このとき僧は鉄鉢の水を口にふくんで、突然ふつと閻の頭
に吹きかけた。

閻はびつくりして、背中に冷や汗が出た。

「お頭痛は」と僧が問うた。

「あ。癒なおりました」実際閻はこれまで頭痛がする、頭痛がす
ると気にして、どうしても癒らせずにいた頭痛を、坊主
の水に気を取られて、取り逃がしてしまつたのである。

僧はしずかに鉢に残つた水を床に傾けた。そして「そんな

「これでお暇いそぎをいたします」と言うや否や、くるりと閻えんに背中を向けて、戸口の方へ歩き出した。

「まあ、ちよつと」と閻えんが呼び留めた。

僧は振り返った。「何かご用で」

「寸志のお礼がいたしたいのですが」

「いや。わたくしは群生ぐんしやうを福利し、橋慢きやうまんを折伏しやくふくするために、

乞食こつじきはいたしますが、療治代りやうぢだいはいただきませぬ」

「なるほど。それでは強しいては申ましますまい。あなたはどちらのお方か、それを伺うっておきたいのですが」

「これまでおつたところでございますか。それは天台の国清寺で」

「はあ。天台におられたのですな。お名は」

「豊干ぶかんと申まします」

「天台国清寺の豊干とおつしやる」閻はしつかりおぼえておこうと努力するようになり、眉をひそめた。「わたしもこれから台州へ往くものであつてみれば、ことさらお懐かしい。ついでだから伺いたいが、台州には逢いに往つてためになるような、えらい人はおられませんか」

「さようでございます。国清寺に拾得じつとくと申すものがおります。実は普賢ふげんでございます。それから寺の西の方に、寒巖かんがんという石窟せきくつがあつて、そこに寒山かんざんと申すものがおります。実は文殊もんじゆでございます。さようならお暇いとまをいたします」こう言つてしまつて、ついと出て行つた。

こういう因縁があるので、閻は天台の国清寺をさして出かけるのである。

全体世の中の人、道とか宗教とかいうものに対する態度に三通りある。自分の職業に気を取られて、ただ営々えきえき役々と年月を送っている人は、道というものを顧みない。これは読書人でも同じことである。もちろん書を読んで深く考えたら、道に到達せずにはいられまい。しかしそうまで考えなくても、日々の務めだけは弁じて行かれよう。これは全く無頓着むとんじやくな人である。

つぎに着意して道を求める人がある。専念に道を求めて、万事をなげうつこともあれば、日々の務めは怠らずに、たえず道に志していることもある。儒学に入っても、道教に入っても、仏法フクリストに入っても基督教に入っても同じことである。こ

ういう人が深くはいり込むと日々の務めがすなわち道そのものになってしまふ。つづめて言えばこれは皆道を求める人である。

この無頓着な人と、道を求める人との中間に、道というものもその存在を客観的に認めていて、それに対して全く無頓着だというわけでもなく、さればと言つてみずから進んで道を求めるでもなく、自分をば道に疎遠な人だと諦念あきらめ、別に道に親密な人がいるように思つて、それを尊敬する人がある。尊敬はどの種類の人にもあるが、単に同じ対象を尊敬する場合を顧慮して言つてみると、道を求める人なら遅れているものが進んでいるものを尊敬することになり、ここに言う中間人物なら、自分のわからぬもの、会得することの出来ぬものを尊敬することになる。そこに盲目の尊敬が生ずる。盲目の尊

敬では、たまたまそれをさし向ける対象が正鵠せいこくを得ていても、なんにもならぬのである。

閩は衣服を改め輿よに乗って、台州の官舎を出た。従者が数十人ある。

時は冬の初めで、霜が少し降っている。椒江しやうこうの支流で、始豊溪しほうけいという川の左岸を迂回しつつ北へ進んで行く。初め陰くもつていた空がようよう晴れて、蒼白あおしろい日が岸の紅葉もみじを照している。路みちで出合う老幼は、皆輿よを避けてひざまずく。輿の中では閩がひどくいい心持ちになっている。牧民の職にいて賢者を礼するというのが、手柄のように思われて、閩に満足を与える

のである。

台州から天台県までは六十里半ほどである。日本の六里半ほどである。ゆるゆる輿かを舁かせて来たので、県から役人の迎えに出たのに逢ったとき、もう午ひるを過ぎていた。知県の官舎で休んで、馳走ちそうになりつつ聞いてみると、ここから国清寺までは、爪尖上つまさきあがりの道がまた六十里ある。往き着くまでには夜に入りそうである。そこで閭は知県の官舎に泊ることにした。

翌朝知県に送られて出た。きょうもきのうに変らぬ天気である。一体天台一万八千丈とは、いつ誰が測量したにしても、所詮高過ぎるようだが、とにかく虎のいる山である。道はなかなかきのうのようには捗はかどらない。途中で午飯ひるめしを食って、日が西に傾きかかったころ、国清寺の三門に着いた。智者大師

の滅後に、隋ずいの煬帝ようだいが立てたという寺である。

寺でも主簿のご参詣だといふので、おろそかにはしない。

道翹どうぎょうという僧が出迎えて、閩を客間に案内した。さて茶菓の饗応が済むと、閩が問うた。「当寺に豊干という僧がおられましたか」

道翹が答えた。「豊干とおっしゃいますか。それはさきころまで、本堂の背後うしろの僧院におられましたか、行脚あんぎやに出られたきり、帰られませぬ」

「当寺ではどういふことをしておられましたか」

「さようでございます。僧どもの食べる米を舂ついておられました」

「はあ。そして何かほかの僧たちと変わったことはなかつたのですか」

「いえ。それがございましたので、初めただ骨惜しみをしない、親切な同宿だと存じていました豊干さんを、わたくしどもが大切にいたすようになりました。するとある日ふいと出て行ってしまわれました」

「それはどういふことがあつたのですか」

「全く不思議なことでもございました。ある日山から虎に騎つて帰つて参られたのでございます。そしてそのまま廊下へはいつて、虎の背で詩を吟じて歩かれました。一体詩を吟ずることの好きな人で、裏の僧院でも、夜になると詩を吟ぜられました」

「はあ。活きた阿羅漢あらかんですな。その僧院の址あとはどうなつていますか」

「只今もあき家になつておりますが、折り折り夜になると、虎

が参つて吼ほえております」

「そんならご苦労ながら、そこへご案内を願ひましょう」
こ
う言つて、閻えんは座を起つた。

道翹だうせうは蛛くもの網いを払いつつ先に立つて、閻えんを豊干ゆへんのいたあき
家に連れて行つた。日がもう暮れかかったので、薄暗い屋内
を見廻すに、がらんとして何一つない。道翹だうせうは身をかがめて
石畳の上の虎の足跡を指さした。たまたま山風が窓の外を吹
いて通つて、うずたかい庭の落ち葉を捲まき上げた。その音が
寂せき寞ぼくを破やぶつてざわざわと鳴ると、閻えんは髪かみの毛けの根ねを締めつけ
られるように感じて、全身の肌あわに粟あわを生じた。

閻えんは忙せわしげにあき家を出た。そしてあとからついて来る道
翹だうせうに言つた。「拾得じつとくという僧そうはまだ当寺とうじにおられますか」

道翹だうせうは不審ふしんらしく閻えんの顔を見た。「よくご存ぞんじでございま

す。先刻あちらの厨くりやで、寒山と申すものと火に当つておりましたから、ご用がおありなさるなら、呼び寄せましようか」

「ははあ。寒山も来ておられますか。それは願つてもないことです。どうぞご苦勞ついでに厨にご案内を願いましよう」

「承知いたしました」と言つて、道翹は本堂について西へ歩いて行く。

閻うしろが背後から問うた。「拾得さんはいつごろから当寺におられますか」

「もうよほど久しいことでございます。あれは豊干さんが松林の中から拾つて歸られた捨て子でございます」

「はあ。そして当寺では何をしておられますか」

「拾われて参つてから二年ほど立ちましたとき、食堂じきどうで上座の像に香を上げたり、燈明を上げたり、そのほかそな供えものをさ

せたりいたしましたそうでございます。そのうちある日上座の像に食事を供えておいて、自分が向き合つて一しよに食べているのを見つけられましたそうでございます。賓頭盧尊者びんずるそんじやの像がどれだけ尊いものか存ぜず^{ただいま}にいたしましたことと見えます。唯今では厨で僧どもの食器を洗わせております」

「はあ」と言つて、閻は二足三足歩いてから問うた。「それから唯今寒山とおっしゃつたが、それはどういう方ですか」

「寒山でございますか。これは当寺から西の方の寒巖と申す石窟に住んでおりますものでございます。拾得が食器を滌あらいますとき、残っている飯や菜を竹の筒に入れて取つておきますと、寒山はそれをもらいに参るのでございます」

「なるほど」と言つて、閻はついで行く。心のうちでは、そんなことをしている寒山、拾得が文殊もんじゆ、普賢ふげんなら、虎に騎のつ

た豊干はなんだろうなどと、田舎者が芝居を見て、どの役がどの俳優かと思ひ惑うときののような気分になっているのである。

「はなはだむさくるしい所で」と言いつつ、道翹は閻を厨のうちに連れ込んだ。

ここは湯気が一ぱい籠もつていて、にわかにはいつて見ると、しかと物を見定めることも出来ぬくらいである。その灰色の中に大きい籠が二つあつて、どれにも残つた薪が真赤に燃えている。しばらく立ち止まって見ているうちに、石の壁に沿うて造りつけてある卓の上で大勢の僧が飯や菜や汁を鍋釜

から移しているのが見えて来た。

このとき道翹が奥の方へ向いて、「おい、拾得」と呼びかけた。

閻がその視線をたどって、入口から一番遠い竈の前を見ると、そこに二人の僧のうずくまって火に当たっているのが見えた。

一人は髪の毛の二三寸伸びた頭を剥き出して、足には草履をはいている。今一人は木の皮で編んだ帽をかぶって、足には木履ぼくりをはいている。どちらも瘦せてみすばらしい小男で、豊干のような大男ではない。

道翹が呼びかけたとき、頭を剥き出した方は振り向いてにやりと笑ったが、返事はしなかった。これが拾得だと見える。帽をかぶった方は身動きもしない。これが寒山なのであろう。

閻はこう見当をつけて二人のそばへ進み寄った。そして袖を搔かき合わせてうやうやしく礼をして、「朝儀大夫、使持節、台州の主簿、上柱国、賜緋魚袋しひぎよたい、閻丘胤きゆういんと申すものでござい
ます」と名のつた。

二人は同時に閻を一目見た。それから二人で顔を見合わせ
て腹の底からこみ上げて来るような笑い声を出したかと思
うと、一しよに立ち上がって、厨を駆け出して逃げた。逃げし
なに寒山が「豊干がしゃべったな」と言ったのが聞えた。

驚いてあとを見送っている閻が周囲には、飯や菜や汁を盛つ
ていた僧らが、ぞろぞろと来てたかった。道翹は真蒼まっさおな顔を
して立ちすくんでいた。

大正五年一月

寒山拾得

寒山拾得

底本：「日本の文学 3 森鷗外 (二)」中央公論社

1967 (昭和 42) 年 2 月 4 日初版発行

入力：佐野良二

校正：伊藤時也

2000 年 9 月 12 日公開

2004 年 12 月 4 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。